09

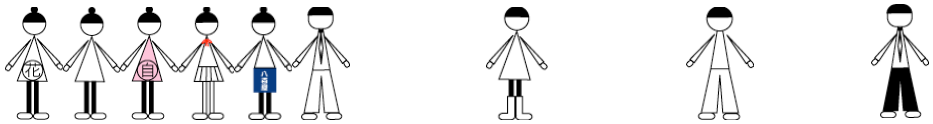
花への思いを束ねてめざす彩り豊かな庭園都市

北海道恵庭市

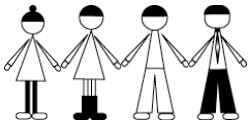
「花いっぱい文化協会」は、1961 年の設立以来、町内会や学校、花苗生産者などと連携しながら、身近な場所での花のまちづくりを積み重ねてきました。1990 年代に新興住宅地として造成された恵み野地区を中心としてガーデニングが盛んになり、「花のまち・恵庭」との評価を獲得するようになりました。

個人・各種団体・企業・花苗生産者・行政など、多くの関係者の協働により、恵庭の名にふさわしい庭園都市を目指した花のまちづくりが彩り豊かに進められています。

人



きっかけ



「花とくらし展」

このイベントでの専門家のアドバイスをきっかけにクライストチャーチ（ニュージーランド）の花のまちづくりを参考にした庭園都市（ガーデンシティ）としての花のまちづくり・庭づくりが盛んになった

活動

住民有志７名が「花いっぱい文化協会」を設立、身近な公共空間の花壇づくり等の活動を自助努力で地道に展開

花いっぱい文化協会の身近な公共空間の花壇づくりに加え、「街に緑を窓辺に花を」をキャッチフレーズとして住民が主体となった花のまちづくりが多様に進展

「花と緑の課」設置、「花のまちづくりプラン」策定、「花のまちづくり推進会議」発足など、花のまちづくりの協働推進体制を整備

恵庭らしい景観形成に向け「景観形成基本計画」「新・花のまちづくりプラン」等に沿って花のまちづくりを総合的に展開

効果

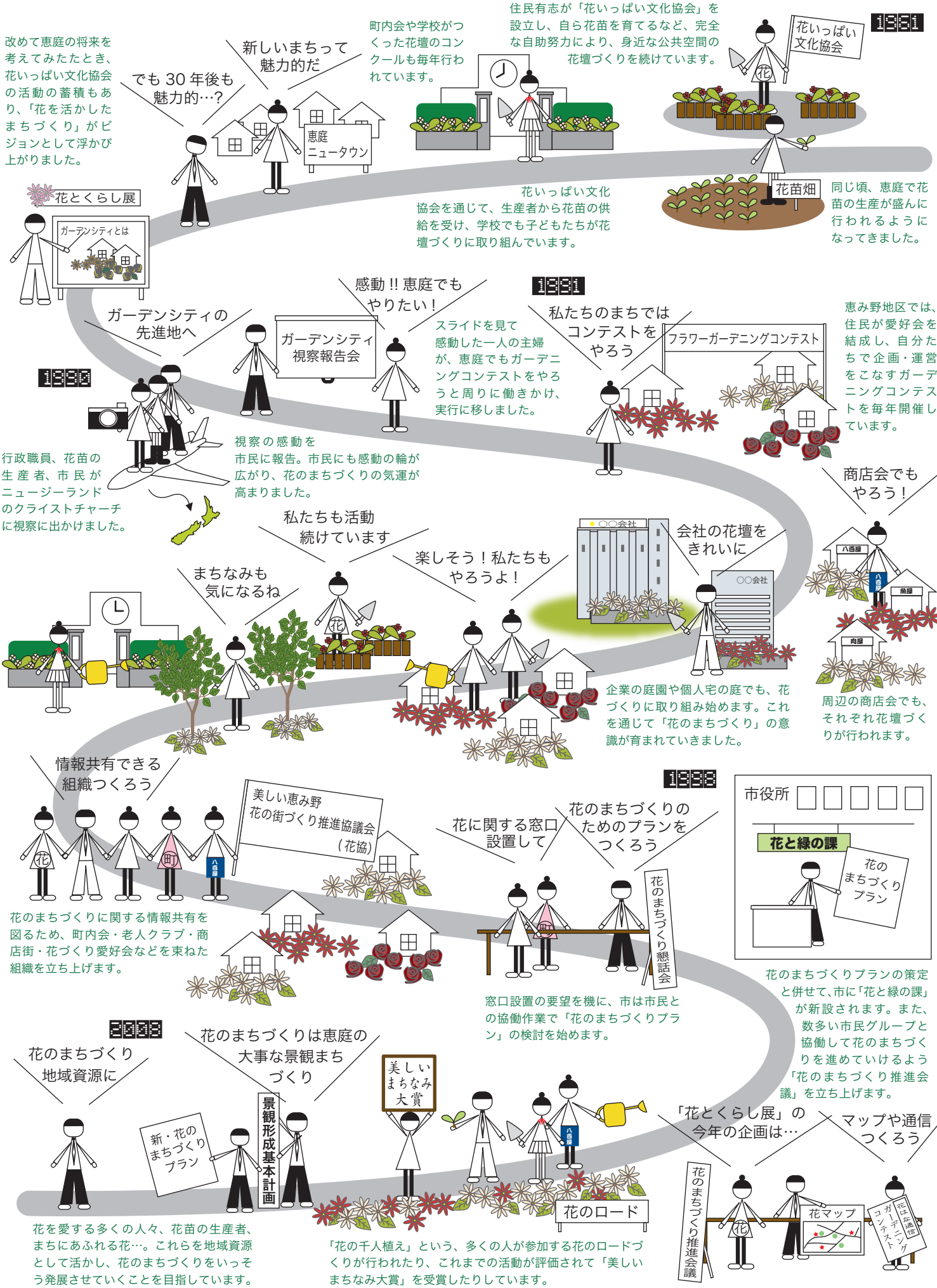
□公共花壇の花植え、家庭でのガーデニング、商店街ぐるみでの取り組み、企業による庭園整備など、住民等による主体的な花のまちづくりが広く行われてきている
□恵庭市内における花の生産と消費の結びつきが強化されてきている
□花のまちづくりの協働体制の確立や、行政計画での明確な位置づけ等が進んでいる
□「恵庭は花のまち」というイメージが形成され、視察や観光客等も増加している

住民・団体等	花のまちづくり推進会議	造園業・花苗生産者等	行政
○各種団体による日常的な花植え活動の継続的実践 ○フラワーガーデニングコンテスト等の実施 ○ガーデニングや公共花壇等の花植え等への参加拡大	○「花とくらし展」等の企画・実行とそれらを通じたネットワーク・交流の充実 ○花はな通信・花マップの発行等による啓発活動	○「花いっぱい文化協会」会員への花苗の提供・斡旋 ○フラワーガーデニングコンテスト支援（費用負担・審査など） ○各種講習会の開催	○花のまちづくりを一元的に担当する「花と緑の課」設置 ○花のまち並み推進事業から助成金を支給 ○公共花壇等の植栽管理委託を通じ住民等の活動を促進・支援

09 花への思いを束ねてめざす彩り豊かな庭園都市

北海道恵庭市

改めて恵庭の将来を考えてみたとき、花いっぱい文化協会の活動の蓄積もあり、「花を活かしたまちづくり」がビジョンとして浮かび上がりました。



□景観まちづくりの３原則からみた成功のポイント□

原則１《地域性》　歴史・文化・産業・意匠・構法・素材などの地域資源の再発見

●市民や企業による身近な空間における花のまちづくり活動の蓄積

・1961年、「郷土を花いっぱい緑いっぱいに」を合言葉に「花いっぱい文化協会」が設立されて以来、今日に至るまで、花苗の生産と斡旋、花壇造成、記念植樹、花壇コンクールなど、身の回りの公共空間を花や緑で彩る活動を積み重ねています。

・さらに、1990年代以降、ニュータウンに造成された恵み野地区を中心として、町内会・老人クラブ・商店街・花づくり愛好会など、地域ぐるみで花のまちづくりに取り組む人たちが着実に増えています。また、以前から花と緑の工場づくりに熱心な「サッポロビール北海道工場」など、市民や企業による敷地内からまち並みへとあふれ出すような花のまちづくりが多様に実践されてきています。

・これらの身の回りの空間に着目した地道な活動の蓄積が、恵庭市が「花のまちづくり」を展開する大きな基盤となっています。

>>自宅の庭や町内の公園の一角など、身近な空間を花や緑で飾る活動は、比較的取りかかりやすく、愛着を覚えやすい場所であり、景観上の効果も把握しやすいという点で有効です。

●北海道を代表する花苗生産地というまちの特性を活かす

・恵庭市では、1960年代より花苗の生産が盛んになり、花の大消費地である札幌市との近接性などの好条件もあり、1980年代には北海道を代表する花苗生産地となりました。現在も花苗の生産に関しては道内トップクラスのシェアを誇ります。恵庭市の花のまちづくりは、花の一大生産地であるというまちの特性を十分に活かしながら展開されています。

・また、花のまちづくりを通じて、恵庭市が、花の消費量が多いまち、花に対する見識の高い住民が多いまちとなることが、花の生産地としての競争力強化につながるとの狙いも持っています。

>>地場産業と景観まちづくりをうまく連携させることで、その地域らしさのある景観形成の推進が期待できますし、地場産業の振興にもつながる可能性があります。

●「恵庭」という地名を体現する「庭園都市」づくり

・恵庭市の花のまちづくりは、「恵庭＝恵まれた庭」という地名にちなんだまちづくりの考え方です。これは、造園家で東京農業大学教授の進士五十八氏の「本格的に花のまちづくりを展開するならば、世界的に著名なガーデンシティ（庭園都市）であるニュージーランドのクライストチャーチの花のまちづくりを参考にしたらどうか」というアドバイスに後押しされています。このアドバイスが、恵庭市が本格的に花のまちづくりに取り組むことになる大きな推進力を与えたと言えるでしょう。

・また、恵庭市には、かつてスズランの大群落があり、スズラン狩りは初夏の風物詩として数万人を集客する一大イベントでした。もともと「花（スズラン）のまち」としての歴史もありました。

>>地名や町名は、その地域の歴史的な記憶をとどめていたり、地域の人たちが共有できるイメージを備えていたりするなど、まちづくりの方向性を考える上で、大きなヒントとなります。

原則２《推進体制》　早期からの適切な行政・市民・専門家のコラボレーション

●花のまちづくりの礎を築いた「花いっぱい文化協会」

・1961年、７名の有志により設立された「花いっぱい文化協会」は、半世紀近くにわたって身近な公共空間の花いっぱい運動を完全な自助努力により実践し続けています。現在では、町内会や学校をはじめ、多くの団体が加入する全市的な組織に発展しています（平成19年度には76団体）。花苗の生産者も会員になっており､花苗の生産と消費を結びつけた組織となっている点も特徴の一つです。

・会員の花に関する技術の向上と普及を図るため、花壇のデザインや花の生育状況等を審査・表彰する花壇コンクールの実施や、会員相互の親睦と技術向上を目指した研修会などの活動を積み重ねています。1990年代以降、恵庭市は「花のまち」としての全国的な評価を固めつつありますが、その礎は、花いっぱい文化協会の地道な活動にあったと言えるでしょう。

・このような活動実績を信頼され、グリーンベルト（恵庭大通線）の花壇や、黄金フラワーロードの沿道花壇など、公共空間における緑化・植栽の推進において大きな役割を果たしています。

>>景観が形成されるには、長い時間が必要であり、地道に活動を継続することが重要となります｡地道な景観まちづくり活動の蓄積が､その地域の個性となるような景観を生み出します。

●「花のまちづくり」活動を自主的に展開する市民等の多様な主体

・恵庭市の花のまちづくりは､｢花いっぱい文化協会｣をはじめ、町内会、学校・PTA、商店街、恵み野地区で地域ぐるみの花のまちづくりに取り組んでいる「美しい恵み野花の街づくり推進協議会｣､遊休市有地を花畑に活用する市民有志、花と緑の工場づくりで知られるサッポロビール北海道工場など、花を愛する多くの主体による多様な活動に支えられています。

彩り豊かな漁町商店街

・それぞれの関心や立場に応じて、さまざまなグループが形成され、活動が展開されています。いずれの活動も、基本的には市民や企業、グループなどが自主的に創意工夫を凝らして取り組んでいるものです。自らの意思で活動を展開していることが、息の長い活動の継続につながっています。

遊休市有地が「いこいの花畑」に

・また、将来にわたる持続的な活動という観点からは、恵庭市内の全ての学校で子どもたちが熱心な花壇づくりを行っていることが特徴です。学校とPTAが「花いっぱい文化協会」を通じて花苗を用意し､児童･生徒が育成管理を行っています。子どもたちによる花壇づくりは、花の景観の創出であると同時に、担い手の育成であり、家庭や社会の意識啓発を促す効果もあります。

子どもたちがつくる学校の花壇

>>身近な景観形成においては、ひとりひとりの関心や立場に応じて、楽しみながら自主的に景観まちづくり活動に取り組めるような組織づくりも有効です。町内会や商店街、学校などの既存組織の活用や、愛好会のような緩やかなグループづくりなどが考えられます。

●協働体制の構築：「花と緑の課」の創設と「恵庭花のまちづくり推進会議」の設置

・1990年に始められた「花とくらし展」は、当初、市民の意欲や行動力を活用した実行委員会方式で運営されていましたが、行政の窓口は必ずしも固定されていませんでした。花のまちづくりに関連するその他の取り組みもさまざまな部局を介して行われており、花のまちづくりに関わる市民等からすれば、窓口の一元化が望まれていました。一方、市民等による自主的な花のまちづくり活動が進展するに連れて、さまざまな団体やグループが組織されるようになり、行政の立場からしても、それらの各団体からの要望等に個別に対応することが難しくなってきていました。

・そのような状況で、「美しい恵み野花の街づくり推進協議会」から、花と緑の担当であることを明確に表した一元的な窓口設置の要望がありました。それを機に、市は、総合計画に位置づけられていた「花のまちづくりプラン」を検討することとし、市民を交えた「花のまちづくり懇話会」を設置して２年間をかけて議論を重ね、1998年3月に「花のまちづくりプラン」を策定しました。プラン策定に合わせて、4月に行政の一元的な窓口となる「花と緑の課」を設置するとともに、「花のまちづくりプラン」の実行組織として、前記のような花のまちづくりに関わる多様な団体で構成する「恵庭花のまちづくり推進会議」を11月に設立し、協働による花のまちづくりの推進体制が整いました。

・「恵庭花のまちづくり推進会議」は、「花とくらし展」の企画開催、マップや通信の発行を通じた花のまちづくりの啓発事業、ネットワーク形成のための講習会、全市域を対象としたフラワーガーデニングコンテストの開催などを行っています。「花と緑の課」は、花のまちづくり推進会議の事務局機能を果たすとともに、恵庭市が関わる花のまちづくり活動はもちろんのこと、国道や道道の植栽管理など、国や北海道との連携を要する活動についても一元的に窓口となっています。

>>景観まちづくりは協働で継続的に取り組むことが重要となるので、そのための適切な推進体制づくりが欠かせません。市民等の意欲や行動力を景観づくりの推進力に活用できる体制、多岐にわたる諸調整を含めた一元的な対応を可能とする行政の体制などが求められます。

原則３《実現性》　計画の実現のための資金や手法、運営等に対する細やかな配慮

●市民・企業・行政、生産と消費を結びつける「花とくらし展」

・1990年、市制施行20周年記念事業として、「まちに緑を窓辺に花を」をテーマに「恵庭花とくらし展」が開催されました。市民に花とのふれあいの場を提供し、花の生産者と花の利用者・消費者を一体的に振興することや、花を暮らしに普及させることを意図したイベントで、以後、毎年開催されています。1998年以降は、「花のまちづくり推進会議」の主催となり、市民が主導的な役割を果たしながら運営されています。

多くの市民でにぎわう「花とくらし展」

・「花とくらし展」を通じて、ガーデニングや花のまちづくりに対する市民の関心喚起・意識啓発、花苗生産業や造園業の振興、「花のまち」としての情報発信やＰＲ等が図られており、花のまちづくりの推進を下支えする役目を果たしています。

>>市民をはじめとする多くの関係者の景観まちづくりに対する関心や意識を高めるためには、景観まちづくりに関連するイベント等を定期的に行うことなどが効果的です。

●「花いっぱい文化協会」が内包する花苗供給システム

・花のまちづくりを行う場合、住民等のまちづくりの担い手、花を植えたり飾ったりする場所と併せて、素材となる花の供給が重要となります。「花いっぱい文化協会」は、会員相互で花苗を供給（斡旋）できるようなシステムを持っています。花苗の生産者（花苗生産組合）も協会の会員となっており、その生産者が供給する花苗を、町内会や学校等の会員は安価（原価）で購入することができる仕組みで、個人も町内会を通じて花苗を購入することができます。あくまでも「会員相互での斡旋」というシステムであり、市民などの特定の消費者を対象にした廉価販売ではありません。

・この花苗供給システムを通じた市内の旺盛な花苗の需要は、花苗の品質の維持・改良、新商品の開発など花苗の生産を強化、振興することにも役だっています。

>>花のまちづくりにおける花苗のように、景観まちづくりの推進に不可欠な素材を安定的に確保・供給できる仕組みは、景観まちづくりの推進基盤として重要です。

●創意工夫を楽しみ表彰する：花壇コンクール・フラワーガーデニングコンテストなど

・「花いっぱい文化協会」では、40年以上の長い期間にわたって、毎年、町内会等が管理する公共的な空間の花壇や子どもたちが育てる小中学校の花壇の表彰コンクールを実施しています。花壇づくりの楽しさにコンクールが刺激と励みを与え、毎年、創意工夫にあふれた花壇づくりが進められています。

創意工夫にあふれた美しい花壇

・恵み野地区では、世界的に著名なニュージーランドのクライストチャーチのガーデンコンテストに触発された住民らによって、1991年からオープンガーデニングコンテストが実施されています。当初は公募方式でしたが、３年目より恵み野地区の全戸を審査対象としています。このコンテストは、ガーデニングそのものではなく、道路から見た庭の景観的な美しさを評価、表彰するところに特徴があります。このコンテストがガーデニングに取り組む人たちを増加させ、また、沿道まち並み景観への関心を高めることにもなりました。美しい庭のまち並みを楽しみに訪れる観光客も増加しています。

道路から楽しめるガーデニング

・2001年から、花のまちづくり推進会議により、市内全域を対象に個人の庭や企業・通り等のガーデニングを表彰するフラワーガーデニングコンテスト「花風人」も実施されています。

庭巡りを楽しむ観光客

・また、恵庭の花のまちづくりの実績は、全国レベルでも高く評価されており、緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰（花いっぱい文化協会・平成7年、サッポロビール北海道工場・平成13年）、都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」国土交通大臣表彰（恵み野地区・平成16年）など、多くの表彰歴を誇っています。これらの表彰も活動に励みと勢いを与えています。

>>景観まちづくりの成果をコンクールやコンテスト等を通じて評価することは、主体性を持って自主的に景観まちづくり活動に取り組む動機づけや励みを与えることにつながります。

>>コンクール等の過程や成果に触れられる機会を工夫することにより、景観まちづくりの意義や魅力を広く周知する効果や、観光・交流の資源となることなども期待できます。

●住民等の自主的な景観まちづくりを支援する助成制度

・恵庭市では、住民が自主的に花を活かした景観づくりに取り組むことを推進・支援するため、「花のまち並み推進事業助成」を行っています。

・景観形成に資すると認められる道路や河川で、その整備が実施・計画されている区域のうち、概ね200mを超える街区単位や橋梁相互の区間を対象として、花を生かした景観まちづくりに取り組む団体等に活動費用助成を行う仕組みです。助成額は、対象経費の1/2以内とし、花苗・緑化木・プランター等の購入に対しては20万円、花壇等の設置に対しては50万円を上限としています。平成19年度では10団体に助成を行っています。

>>住民等による自主的な景観まちづくり活動が、まちづくりの方向性として行政から見ても適切だと判断できる場合、その活動を支援する費用助成等の措置を講じることも有効です。

●「花のまちづくり」を恵庭の地域資源として各種行政計画に位置づけ

・恵庭市の花のまちづくりは、花いっぱい文化協会の地道な取り組みをはじめ、恵み野地区での活発な花のまちづくりの取り組み等を中心とした住民活動や、企業、花苗生産者等の自助努力で成果を積み重ねてきました。行政も「花のまちづくり」を重要視する姿勢を明確にしてきています。

・そのきっかけは、1990年に市制20周年を記念して開催された「花とくらし展」であり、そこでのクライストチャーチにおけるガーデンシティづくりの紹介でした。花のまちづくりに恵庭の明るい将来を重ね合わせていたのです。「花とくらし展」を契機に恵庭のまちづくりの方針は「花のまちづくり」へと大きく舵が切られました。

・第３期総合計画で方向づけられていた「花のまちづくりプラン」が1998年に策定され、2006年から始まる第４期総合計画では、将来都市像が「水・緑・花　人がふれあう生活都市　えにわ」とされており、「花」が明確に位置づけられています。2008年3月には「花のまちづくりプラン」の改訂、「景観形成基本計画」の策定、「観光振興計画」の策定がなされていますが、いずれの計画においても「花のまちづくり」は重要な取り組みとして位置づけられています。今や、花のまちづくりは、恵庭市のまちづくりの重要な芯になるものとなっています。

・「花のまちづくり」全体を恵庭らしい重要な地域資源と捉え、さまざまな行政計画に位置づけることにより、暮らしの豊かさの実感、花のまちづくり関連産業の振興や雇用の創出、観光・交流の創出・活性化なども視野に入れた総合的な施策の展開が志向されています。

>>個性的な景観まちづくりを重要な地域資源と捉えることにより、分野を超えた総合的な政策として展開することが検討できるでしょう。そうすることにより、それぞれの施策が相乗効果を発揮し、厚みのある景観まちづくりを推進することも期待できます。